

## 火薬帝国試論 —オスマン帝国の火器—

齋藤 俊輔

### はじめに

「大砲」や、「銃」、「地雷」といえば、最近では「タリバン」がもっぱらの話題であるように思う。しかし、2001年7月、教科書問題が外交問題にまで及び、大いに話題であった(この頃、執筆依頼があった)。「そのようなことがあったから」というわけではないが、まず初めに、世界史の教科書における、本稿のテーマの「火薬、火砲」の取り扱いについて眺めることにしてみよう。

山川出版社によって出版されている教科書に、『詳説 世界史』がある。これは、全国の高等学校で幅広く使用されているものである。この『詳説 世界史』の索引の欄を見ると、火薬(火砲)の項がある。それによれば、88ページと151ページの二箇所はこの単語があるということだ。さっそく88ページを開くと、中国・宋代の文化を取り上げた個所で、火薬の単語は、「またこの時代には木版印刷術が発達し、文化の普及に役立った。火薬の製法が知られ、羅針盤が航海に利用されるようになったのもこの頃で、これらはいずれもヨーロッパより早く実用化された」、という文章の中にあられてくる。

さてもう一方の151ページでは、火薬に

関して、「ルネサンス時代には、技術の分野でも、ヨーロッパの発展に大きな影響を及ぼす三大発明が成し遂げられた。火砲(火薬)・羅針盤・活版印刷がこれである。」の文章を手始めに、『技術と科学精神の目覚め』と言う小さな章立てを設けて触れている。

これは、この発明の大きさに比して考えると、教科書での取り扱いは大きいといえるのだろうか。

もちろん、「火薬、火器」の取り扱いが小さすぎるから悪いとか、もっと掲載を大きくせよ、などと教科書に意見を申すというわけではない。ただ、ひとつの見方として「科学・技術から歴史を眺める」ことも可能であるということを示すのが、わたしの目的である。そういった意味で、本稿は試験的な試みともいえる。それゆえ、題名にも「試論」と用いた。というわけで以下、「火薬帝国」の定義についてを若干論じ、そして具体的な事例としてオスマン帝国を取り上げる。しかし、オスマン帝国の歴史は、その期間も長大で、かつ組織も複雑であるため、これを一度に通観することは難しい。今回オスマン帝国については、帝国成立初期の銃火器受容と軍事組織形成について考察していく。

## 1. 火薬帝国と軍事革命

歴史を考える際には、いくつか時代を区分して考えられるのが普通である。例えば、よく知られている時代区分に、「古代」、「中世」、「近代」といったものがある。ただ、それは歴史家の意図や考え方によって変化するものであって一様とはいえない。そうした歴史の時代区分について、興味深い方法でおこなう歴史家がいる。技術史家のアーノルド・パーシー（以下、A・パーシー）である。A・パーシーは、著書である『技術の千年史』のなかで、「火薬帝国—1450～1650」として一つの章を割いて言及を行っているのである。

この時代区分についてのA・パーシーの主張は、ヨーロッパにおける「軍事革命」の概念も意識して構築された議論であると思われる。それゆえ、まずは「軍事革命」について述べておくことにする。「軍事革命」の概念は、マイケル・ロバーツによって、はじめて提唱された。ロバーツは、これをベルファストのクィーンズ大学での就任講義で、「軍事革命1560～1660」として発表したのである〔パーカー 2001：5〕。ロバーツは、「軍事革命」の論点として4つを挙げた。

それは、1. 火器（主としてマスケット銃）の普及と、それによる戦術の変化、2. 軍隊の規模の急激な膨張、3. そうした巨大化した軍隊を扱うための戦略の構築、4. 戦争のインパクトの拡大が及ぼす社会的影響について、である。また、ロバーツの主張は、スウェーデンを素材として論じられていた〔加藤 1999：173〕。

そして、このロバーツの提唱を受け継ぎ、

地域と時代を広げた論議を展開したのがジェフリー・パーカー（以下、G・パーカー）であった。G・パーカーの主張によれば、16世紀の戦争に影響を与えたのは、マスケット銃ではなく攻城砲によるものである。そして攻城砲の普及は、イタリア式築城術を生み出し、ヨーロッパの戦争では攻城戦中心になり、歩兵の数もそれに影響され増加したとする。また、この変化は、北イタリア、スペイン、フランス、ネーデルラントが中心に起こったものとした。G・パーカーは、さらにヨーロッパ以外の地域との関わりにも触れ、「大砲」と「艦船」と「要塞」を、つまり一連の「軍事革命」の結果を16世紀以降におけるヨーロッパの世界進出の原動力として、この革命を捉えている。ロバーツの提唱が、ヨーロッパ内の展開であったものに、G・パーカーがその概念を拡大して論じたのは「軍事革命」の果ての世界制覇であった。

ただ、G・パーカーが「軍事革命」の解釈を拡大したとはいえ、当然議論の関心はヨーロッパの内的変動に注がれていた。G・パーカーは、W・J・ハブリンより送られた論文より得た知見から「これまで以上にたくさんの要塞と軍艦を建造し、これまで以上におおぜいの兵士を徴発し武装させなければならなかった国々は、組織と兵站の面で深刻な課題に直面した。だが、結果的にはこれが統治の革命をひきおこし、そこから18世紀の近代国家誕生の道が開かれた、…」と述べている〔パーカー 2001：4〕。この文面を見るかぎり、G・パーカーはヨーロッパにおける絶対主義の時代の到来に着目していると思われる。絶対主義は、一般的には王権が強力となった時代であり、

それを支えるものが官僚制と常備軍であった。つまり、さきほどのG・パーカーの引用も、官僚制と常備軍の漸進的な変化について述べているものもといえる。そして、近代国家という文脈には、国民国家・主権国家の形成という意味合いも持たせている。

「軍事革命」については、ロバーツからG・パーカーへ受け継がれることによって、幅広く知られる概念となっていった。一方、「火薬帝国」の定義は、A・パーシーによれば、技術と統治機関と社会構造との関係から見た場合、ウィットフォーゲルの「水力社会」の概念匹敵するものだという。A・パーシーは、この「火薬帝国」の定義について、二人の歴史家の見解を挙げて説明している。二人の歴史家というのは、イスラム史家のマーシャル・ホイジンと、W・H・マクニールである。

ホイジンの「火薬帝国」の定義は、オスマン帝国、サファヴィー朝ペルシア、ムガル帝国を議論の対象としたものである。

パーシーのホイジン解釈は、大砲、拳銃、そして時にはロケット弾が、これら三つの帝国の勢力範囲の拡大を促進し、そして支配力の集中を強力に進めた効果をもたらしたのだとする。その根拠は、地方の権力者にとって銃火器を取得し配備するのに必要な条件として、できる限り資源を追い求め権力を強化することがあるからである。そうした結果、国家が兵器生産のための資源、そして製造管理を行うようになって、これらの帝国の主戦力だった騎馬から銃を扱う歩兵部隊に主力が移って、それまで馬やその他生産力としての土地や家畜を所有していた伝統的な上流階級の重要性は薄れていくのだと論じた〔パーシー 2001 : 132〕。

つまり、国家の体制に変容が生じることを論じていると思われる。

また、W・H・マクニールの論点についてのA・パーシーの解釈は、中国を「火薬帝国」の範疇に分類するのは、とくに清朝のチベット併合、新疆とモンゴルへの侵攻、そしてロシアとの対峙における、強力な軍隊と銃火器の使用をその根拠にしているのである。しかしA・パーシーは、中国をイスラムの「火薬帝国」とは全く異質だったとする。A・パーシーが、イスラムと中国の間の相違点として問題にしているのは、軍人支配と官僚（文官）支配の違いから生じる社会システムについてである。中国では、支配層は文官であり、またその文官によって軍隊が掌握されていたのである。A・パーシーは、とくに体制の違いの下では影響を受ける技術の種類も違うことを、強調して主張しているのである。

また、A・パーシーは「火薬帝国」の外部的、内部的拡張の要因として銃火器にあまり重点をおきすぎて、社会システムを無視しすぎることはないように警鐘を鳴らす。そうした上で、やはりオスマン帝国、サファヴィー朝ペルシア、ムガル帝国には、軍事制度とその宮廷生活の関係で、文化と社会の仕組みに類似があったため「火薬帝国」を妥当な定義とする。そして、A・パーシーは日本やヨーロッパについても若干の付言を行っているが、これらの国については「火薬帝国」の範囲に入れるべきではないという判断を下している。それは、前述したように社会システムを軽視することになりかねないからである。

A・パーシーの「火薬帝国」という考え方とロバーツとG・パーカーの主張には、

ともに火器というものの出現から、中央集権体制を確立と、一方で外部への拡張がなされていったとみなす点で類似点があると思われる。ただ、A・パーシーの「火薬帝国」取り扱いの詳細を極めているわけではないため、G・パーカーらの議論と類似しているからといって、それを根拠にして簡単に火器と中央集権、そして勢力の伸張を結びつけるような結論を導くわけにはいかない。

そうしたことから、「火薬帝国」の定義を再検討するため、オスマン帝国、サファヴー朝ペルシア、ムガル帝国、そして中国における火器との関係を具体的に考察する必要があるかと思われる。ここでは、まずオスマン帝国にかぎり考察をはじめていくことにする。

## 2. オスマン帝国の火器

オスマン帝国と火器との関係を考えるに及んで、火器の導入に際して、オスマン帝国はそれを受け入れる「素地」をもっていたと思われる。そのため、関係の深いと考えられるイスラム圏、バルカン半島との関係から論じはじめることとする。そして、つづいてオスマン帝国自体について記述する。また以下の本文中では、オスマン帝国が勢力を拡大したごとに意図的に、オスマン侯国、オスマン朝、「帝国」という言葉を使用した。

### (1) オスマン「帝国」以前の火器との関係

火薬によらず「ギリシアの火」を源流にした焼夷兵器は古代から使用され、アッバース朝のイスラム軍には焼夷兵器の専門部

隊が置かれていた。焼夷兵器の使用は、主にある大きさの容器を投擲する方法で行なわれた。容器の大きさにも様々なものがあり、最も一般的だったのは手投げ弾であった。焼夷弾の中身は、大抵ナフトつまり石油から作られていたのだが、その他にも硫黄などの物質が混入された。イスラム世界で最初に火薬が扱われた時期に関して、今だ確定はなされておらず今日も軍事技術上の問題の一つである〔アルハサン、ヒル 1999：148〕。しかし、考古学的見地から見ると少なくとも12世紀頃までには、火薬が使用された形跡がある。

初期の火薬は、焼夷兵器の一環の流れの中で使用されていたといえる。つまり、火薬は、手投げ弾や今までの焼夷兵器の応用として使用されていたのである。しかし、火薬の威力は予想以上に大きなもので、それまでの焼夷兵器を凌駕し、十字軍との戦いにおいて、その真価を発揮した。アルハサンによれば、当時の文献には、これについてヨーロッパ人たちのイスラムの兵器に対する驚きと恐怖を述べた記録が残っていると述べている。

火薬の使用とその高まりとともに、軍内における工兵の役割も大きくなった。工兵の部隊には、鍛冶職、大工、鋳物師、ナフト工その他が含まれていた。

しかし、火薬の使用は焼夷兵器として側面、つまり焼夷兵器の威力を拡大したというだけではなかった。それは攻城兵器としての性格を、大砲の出現を待たずしてすでに有していたのである。アルハサンらは、その端的な例が1291年の十字軍とのアクルでの戦いであったとする。

このような流れがあり、大砲が出現し、

そして使用された。その出現は13世紀頃にはマグリブ地方及びスペインで見られた。石油が利用できなかったことが、この地域が他の地域に比べて早く大砲利用した要因となったようだ〔アルハサン、ヒル 1999：152〕。

大砲の使用がイスラム世界で象徴的かつ実用的に利用されたのは、マムルーク朝時代のモンゴル軍との戦いにおいてであった。大砲は、特にモンゴル騎兵の混乱を誘い、大いに効果をあげた。そして、攻城兵器としての大砲の使用も、この頃から一般的になっていた。イスラム世界で大砲の使用が大いに実施されたのは事実であるが、本格的に軍隊組織に組み込まれ、そして活躍したのはオスマン「帝国」の出現からだと思われる。

## (2) バルカン半島での火器

バルカン半島にとっても、オスマン朝にとっても、14世紀は激動の時代であった。ビザンツ帝国は衰えて、バルカンでの地位はすでに支配的というよりも、バルカンの一国家という程度の力しかもたなくなっていた。

バルカン半島の東では、ブルガリア帝国が12世紀半ばに勃興した。このブルガリア帝国が14世紀半ば頃から、弱体化していくと、今度は半島の西に位置したセルビア王国が勢力を伸張し始める。セルビア王国はステファン・ドゥシャン（在位1331～55）の下で、ビザンツ帝国を脅かすが、このことでビザンツ帝国がオスマン朝に援助を求め、オスマン朝のバルカン進出を促進させた。その上、ドゥシャンが急死するとセルビア王国は混乱し、さらにオスマン朝に好

都合な状況を提供してしまったのだ。また、オスマン朝の他にも外部からの圧力は存在していた。イタリアのヴェネツィアやジェノヴァである。とくに、ヴェネツィアは第4回の十字軍遠征の結果、エーゲ海の島々に領地を持ちバルカンへの影響力は多大なものがあつた。そのうえ、そのヴェネツィアとジェノヴァがテネドス島を廻って争うようになったことは、それらの対岸に位置するボスニア及びバルカン半島全域に、危機感をもたらしたと思われる。

イタリアやオスマン朝による脅威は、バルカンにとって火器を求めるには十分な理由であつたようだ。バルカン半島における大砲の使用について最初の言及は、1378年8月13日にあつたコトルの町の守備隊とヴェネツィアの艦隊の戦闘であつた。コトルは3門の大砲を用意していた。他の記述としては、1378年の9月7日にはドゥブロヴニクの議会はトロギルの町の鑄造師が大砲を作るという要求を承認し、そして9月22日には秘密裏にドゥブロヴニクの費用でボスニア国王が大砲を持つことを許したとある。そして9月末にはドゥブロヴニクの胸壁には大砲が設置されたということである。1379年にはゼータの町の支配者は火器を得ようとしていた。さらには、1380年にはボスニアにも火器は到達していたようで地方年代記録の記述が残っている〔Petrovc 1975：170〕。

セルビアでも1380年代には火器の使用が広がっていたのである。史料は失われているのだが、ペテロヴィクは1382年と1386年の間には火器が使用されていたと推測している。それによれば、ラザル王子がゴルアク要塞の包囲で用いたもので、ハンガリ

一人がそれを持っていた。また、王子はドゥブロヴニクと契約を結んでいて、それが1386年以前にあったという言及がある〔Petrovc 1975：171〕。

こうした火器の普及は、ヴェネツィアとドゥブロヴニクが一役かっていた。ヴェネツィアはバルカン半島の北西部やヴェネツィア領に大砲を供給した。そして、バルカン半島の中央部や南部にはドゥブロヴニクが主要な供給者としての役割を担っていた〔Petrovc 1975：173〕。

### (3) オスマン朝のバルカン半島進出と火器

オスマン朝のバルカンへの拡大は早くから始まったものであった。特にバルカン半島との関係が密接になってきたのは、オルハン王（在位1326～62）の治世でビザンツの要都ブルサを獲得してからである。ブルサがオスマン侯国の首都として発展する中で、そこは商品の集積地となり、イランやヴェネツィア、ジェノヴァから商人が訪れた。また、この時代にオルハンは、銀貨を鑄造し商業の育成に力を入れていた。この時、すでにオスマン朝のバルカン半島への進出が始まる兆しが現われていた。バルカン半島の章で述べたように、ビザンツ帝国は昔日の勢いを失っていた上に、1341年に王位をめぐる争いが、ビザンツ帝国内に生じた。この内部抗争でヨハネス五世と争ったカンタクゼノスは、1353年オルハンに援助を求めた。その結果オスマン朝はヨーロッパに初めての領土、ゲルポリ近くのチンペ城砦を得た。

オルハンの死後、ムラト一世（在位1362～89）が跡を継ぐとバルカン地方への本格的な進攻が始まる。ムラト一世の即位の

時期についてはっきりしないことがあるらしいが、1362年には、オスマン朝はアドリアノーブル（現 エルディネ）を占領していた。このことで、バルカン半島の諸侯たちは、オスマン朝に対して危機感を抱き、十字軍を結成した。1364年マリツァの戦いが起こる。ハンガリー、セルビア、ブルガリア、ビザンツ、そしてワラキア、ボスニアの混成からなる十字軍は二万人を擁していた。しかしながら、数に劣るオスマン軍は軽騎兵の急襲でこれらを退けることに成功した。そして、オスマン朝とバルカン諸侯との間に起きた戦闘でひとつの節目とされる事件が起こる。1389年のコソヴォ平野の戦いである。

ところが、この戦闘でムラト一世は戦死してしまった。このため、バルカン半島の征服劇は息子のバヤズイト一世（在位1389～1402）によって受け継がれることとなった。バヤズイト一世は「稲妻王」の異名をもっていた王で、領土拡大を精力的に進めた。バヤズイト一世は西アナトリアのトルコ系諸侯国を再統一する一方で、バルカン半島での勢力の拡大にも努めた。1396年、ニコポリスの戦いで、ハンガリー王が結成した西ヨーロッパの騎士を含む「十字軍」と戦い、これを破りその結果バルカン半島でのオスマン領はドナウ河畔まで拡大したのだった。さらに、南東アナトリア、黒海沿岸と征服し、オスマン朝は一時的にこの地域に大きな影響を及ぼす「帝国」となったのである。

しかしながら、このバヤズイトの「帝国」は1402年に瓦解してしまう。バヤズイトが勢力を拡大したのと同じ時期、中央アジアではティムールが大帝国を築きつつあった。

そのティムールがアナトリアに進出してきたのである。そこで、両者は戦闘を交えることとなり、7月アンカラの戦いが起こる。バヤズィトはこの戦闘で敗北し捕虜となり、1403年に死去する。これによって、オスマン朝は、その君主を失って、領土喪失のみならず存在すら消滅するかもしれぬ危機に陥ったのである。そして10年以上の空位時代の後、メフメト一世とムラト二世の時代を経て、メフムト二世が即位するようになると再び「帝国」の威厳を取り戻すのであった。

こうしたオスマン朝のバルカン半島への領土拡張の中で、前述したようなバルカン半島での銃火器の使用をオスマンのスルタンたちは見逃すことがあったのだろうか。歴史家のペテロヴィクは、バヤズィト一世によるカラマニアの戦闘や、同じくバヤズィトによるコンスタンティノーブルの包囲で大砲が使われたことに言及している。ペテロヴィクが取り上げる史料は「攻城兵器は乾いた土地の多くの場所にとりつけた。その時、大砲はしかるべき方法で製造されてはいなかった」というアシクパシャザーデ (Ashikpashazade) の記事である [Petrovc

1975 : 175]。また、軍事史家のデヴィット・ニコルも1388年のカラマニアの戦闘や、1389年のコソヴォの戦い、そして1396年のニコポルの戦いで大砲が使われた可能性があるとして述べている [ニコル 2001 : 19]。

大砲の使用が、14世紀にはオスマン軍にも採用されたとみる向きは、セルビアの部隊がオスマン朝に仕えていたことから推測できるかもしれない。デヴィット・ニコルは、「バルカン諸国は明らかにオスマン砲兵隊の源泉の一つだった [ニコル 2001 :

19]」と述べている。バヤズィト一世はセルビア人やビザンツの兵士を西アナトリア制圧に用いていた。1402年のアンカラの戦いでも、セルビアの兵士はバヤズィト一世に遣えていた。そして、そのときそれらの兵士たちは火器で武装していた。

また、このころローマ法王は非キリスト教徒との交易において鉄と武器の取引を禁止していたことは、武器の輸出が当然のごとく行われていたことを示しているように思える。また、ヴェネツィアでも金属の輸出に制限が加えられるなどしたことも、それと同じ意味をもつことのように思われる [Petrovc 1975 : 176]。

しかし、以上のようなオスマン軍と火器の関係を示すような史料が少ないことは、ペテロヴィクも嘆くところである。つまりは、初期のオスマン軍における火器についての言及をさらに深めることは困難かと思われる。ただ、この関係においてオスマン朝、バルカン半島、そしてイタリアの3者の動向が、非常に重要であることは記憶に留めておかなければならない。

#### (4) オスマン朝の組織改革

オスマン集団が出現した当初は、「ガーズィー」と呼ばれる結社的集団に拠っていたということである。「ガーズィー」とは、「イスラム世界の辺境を防衛し、異教徒と戦う」という名目で、領地や戦利品の獲得を目的に襲撃しつづける戦士を指している [ニコル 2001 : 3]。このオスマンの集団は、遊牧民と農民からなり、支配領域も小さく、それほど組織としての複雑を必要とされなかった。そのため、オスマン家出身の指導者と、その他の戦士たちとの関係は支配関

係というよりも協力関係であった。

「ガーズィー」の集団が転化を迫られるようになったのは、オスマン集団が西のビザンツ世界に対して征服活動を展開した13世紀の終わり頃からであった。勢力を大きくするには、君主中心の集権的組織が必要とされたのである。このとき支配組織作りの推進力となったのは、イスラム法学者であって、トルコ語では「ウラマー」と呼ばれる者たちであった。ウラマーたちは、イスラム法学者を養成するのみならず、ヴァズィール（宰相）職を、オスマン朝の二代目オルハンの治世に創設した。ヴァズィールの創設は、「ガーズィー」とは違う組織がオスマン集団に生成されたことを意味し、つまりは君主を中心とした支配組織を生み出したのであった。また文字的技術を持つイスラム法学者たちは、官僚組織の中心としても重要であった。

こうした集権化のいまひとつの軸として創設されたのが、イエニチェリであった。イエニチェリは、16世紀になると火器を装備してオスマン朝の軍隊と中心となっていく歩兵部隊である。そのイエニチェリの創設は、1326年にその源流を遡ることができる。

イエニチェリが創設される以前、オスマン朝軍の軍事組織の中心は、先に述べたムスリム・トルコ系の戦士集団「ガーズィー」で、支配地の遊牧民と農民が中心であった。イエニチェリは、イスラム世界では一般的であった軍人奴隷からなる常備軍の整備をモデルとしたものであった。つまり、「ウラマー」と同様に、イスラム圏の流れを汲み成立していくという過程がイエニチェリにも見ることができる。彼らは、給与制の

兵士であり、兵士以外の職業にはつかなかった。また、妻帯も許されず、独身であった。

常備軍のための奴隷の人員補充は、マルムーク朝では御用商人の購入に頼っていたが、オスマン朝の人員補給源は、はじめ戦争捕虜であった。しかし、より恒常的に人員を補充するために、14世紀末までにはデヴシルメ制が創出された。デヴシルメ制は、オスマン領内のキリスト教徒臣民の子弟から10代の少年を強制徴収し、君主の奴隷としたうえでイスラム教に改宗させて、トルコ語を学ばせ特別な訓練の後、奴隷軍人として用いる制度であった。君主直属の軍人奴隷であったイエニチェリは、最初は歩兵軍として存在したのだが、それに加えて騎兵や砲隊、その他の補助軍団も作られていった。

イエニチェリは、拡大するオスマン領に比例するかのようには増大していった。それは1360年代の1000人から、バヤズイト一世の時代には5000人に増大したのである〔永田・羽田 1998 : 106〕。さらに15世紀から16世紀にかけて大きく成長し、メフムト二世の頃は12000人となり、スレイマンの治世には、48000人の兵士のうち20000人がイエニチェリであった〔三橋 1984 : 117〕。

このイエニチェリの増加の背景には、デヴシルメ制による人材徴発があるのだが、前述したようにキリスト教徒に人員は求められた。これはどのようなことを示すのだろうか。また、積極的にイエニチェリを増加させるにはその人員を求めることのできる場所、もしくは地域が必要である。そうした地域は、バルカン半島であると思われる。バルカン半島が、キリスト教にとってイスラムの脅威から西欧を守る牙城であっ



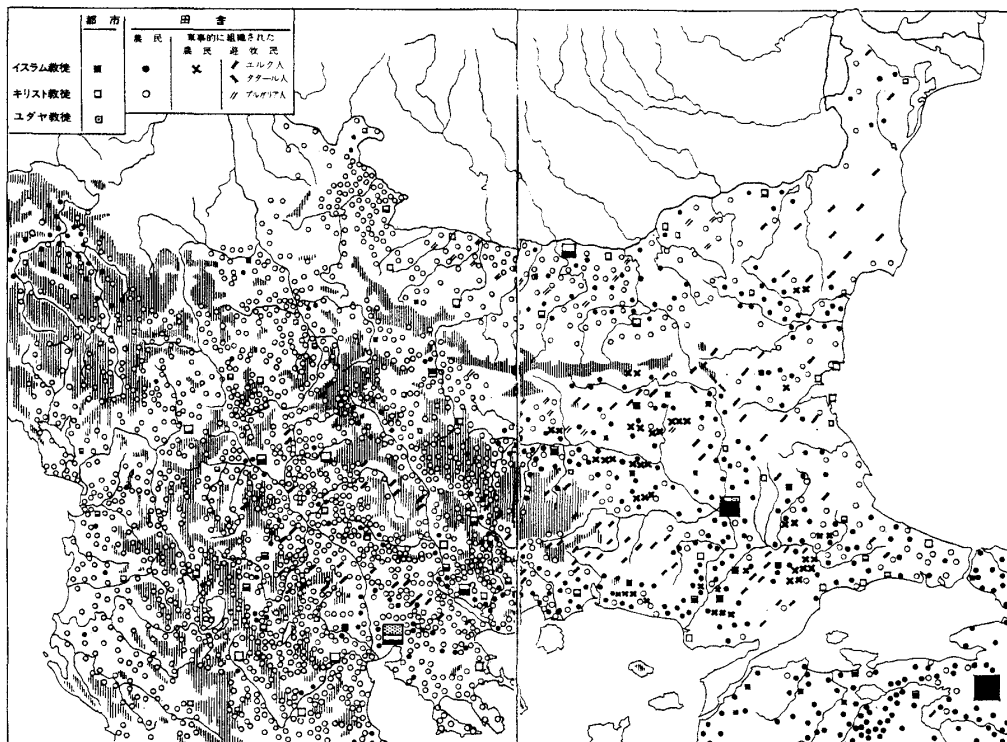
たことはよくいわれることだが、確かにオスマン朝との戦いでも「十字軍」の名のもとに戦っている。ビザンツ帝国を媒介にして、バルカン半島のスラブ諸族はキリスト教を受容していたのである。また、バルカン半島におけるキリスト教との状況は以下の図〔図1〕にも示されるところである。この図を見れば、いかにバルカン半島では、白抜きの表示であらわされるところのキリスト教が優位であったかが一目瞭然である。つまり、オスマン朝がデヴルシメ制の人材供給をおこなうとすれば、その人員はバルカン半島に求められると考えて差し支えないのではないと思われる。

ただ付け加えると、初期のころの軍事組織ではイエニチェリのみがオスマン軍の中心というわけではなかった。16世紀まではむしろ、シパーヒー騎兵がその中心をなし

ていたということである。ティマールと呼ばれる軍事封土をスルタンより受け、戦争時にはそれに応じて一定数の従士を率いて出征すること義務づけられた、その最小封土所有者がシパーヒーであった。だが、シパーヒー騎兵も16世紀の中頃からティマールをしだいにイエニチェリに吸収されていくようになり、その軍事的地位は弱まっていった。

「ウラマー」と「イエニチェリ」の2つの組織は、専制君主を支える形で成立して、オスマン朝は「帝国」の基礎を築いた。それがアンカラの戦い以前になされていたのである。また、注目しておくべきこととして、この二つのイスラム圏で見られるようなシステム（つまり、軍人奴隷からなる常備軍の設立）をオスマン朝が受容したことで、イエニチェリが新たに獲得したバルカ

図1 16世紀初頭のバルカン半島の人口



出所：ブローデル 1993 より転載

ン半島の人員を入手することで成り立っていたのではないかということである。

### (5) コンスタンティノーブルの陥落

1453年、ビザンツ帝国はコンスタンティノーブルの陥落を以って、ローマ帝国以来の命脈を絶つこととなった。一方で、オスマン朝側からすればこの事件により『帝国』の道が確実に開かれたといえる。ひとつは、コンスタンティノーブルのような大都市を得ることは政治的、経済的などあらゆる面での影響力が増大することを意味した。また、オスマンの君主が、ガーズィー軍団の首長から、スルタンというイスラム国家の君主の称号に加え、さらにビザンツ皇帝の権威をも手に入れることになった。つまり、バルカン半島でのオスマン帝国の権威は深部にまで浸透することとなった。

コンスタンティノーブルの陥落は、そういったオスマン帝国史上における転換点としての意味のみならず、火器（とくに大砲であるが）の歴史においてもひとつの象徴となった。

コンスタンティノーブルの攻略は、すでにバヤズィト一世の頃から行われてはいたのだが、アンカラの戦いの敗北で一旦この大事業は打ち切られたのであった。その後、再びこれを攻略する力を蓄えあらわれ、実行したのがメフムト二世である。メフムトはヨーロッパ側からは、「破壊者」などと呼ばれ恐れられた君主である。メフムトが、コンスタンティノーブルの攻略をはじめたのは1453年の春であったが、実質1452年には占領への準備は始まっていた。それは、まず250から350隻のオスマンの艦隊によって、コンスタンティノーブルを付近のマルモ

ラ海から脅かすことから始まった。また、オスマン朝の陸上兵力はトラキアに集結した。正規軍が8万人、不正規軍が2万人、その他非戦闘員の数千人がその規模であった〔ランシマン 1983：119〕。

同じ年、ハンガリーから一人の技術者がメフムトの元へやってきた。ハンガリー人大砲鑄造師ウルバンである。ウルバンは、ビザンツ皇帝とも交渉を行っていたが、報酬の折り合いがつかずメフムトの元へとやって来たのであった。メフムトは、このウルバンを雇い、「マホメッタ」と呼ばれる巨砲を建造させたのである。砲身は約6.6m、砲身を取り巻く厚さは約20cm、砲身の円周は後部が約81cm、前方が約2m44cmで、砲弾は約600kgの重さであったという〔ランシマン 1983：122〕。もちろん、この他にも大砲はウルバンの指導の元で製造されるのだが、これより大きなものは作られなかった。

この巨砲を率いて、メフムトはメソティキオン城壁〔地図1参照〕に相対して陣幕を置いた。オスマン軍は、コンスタンティノーブルを陸上からも、海上からも包囲したのだった〔地図2参照〕。また大砲はメフムトの手元に置かれたのみならず、リュコス川をはさんで北の方面の城壁を破壊するためにカラジャ・パシヤの軍にも配置された。

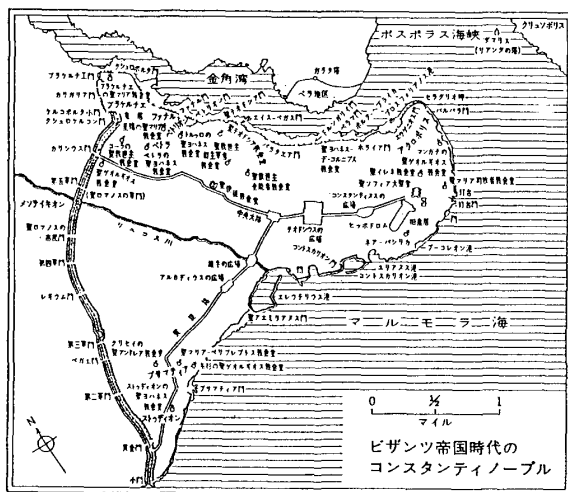
1453年4月6日、戦闘の火ぶたは切って落とされた。巨砲を中心とするオスマン軍の大砲は、突破口を作るため城壁を砲撃した。しかし、現代の我々の想像するような、一撃で城壁を破壊するような威力を、この時の大砲にもっていたわけではないと思われる。それは、この戦闘が終結するには五

月の終わりであるが、その時になってやっとメフムトは城壁を乗り越えて突撃している。大砲はそれまでの間ずっと城壁を砲撃していたのである。つまり、突撃がなく1ヶ月以上も砲撃しつづけていたというのは、当時の大砲の威力ではメフムトが臨むような「大きな穴」を空けられなかったのではないかと考えられるのである。もちろん、城壁の修復を、ビザンツがわが巧妙に行った上、守備も巧みに行ったことがメフムトに突撃の機会を躊躇させる原因となったことは考慮に入れるべきではある。

陸上でコンスタンティノープル攻略が進まなかったことは、大砲の効果が弱かったような印象をもたせるのだが、大砲は海上の艦隊に対しては有効だったようである。メフムトは海上にも兵力を置いていた。オスマンの艦隊が戦闘の行われた直後に金角湾〔地図1参照〕に入るために、港口の防鎖の攻略を試みたが、ギリシアの艦隊に破れ、失敗に終わった。これにメフムトは、港口を砲撃できるような大砲を作ることで

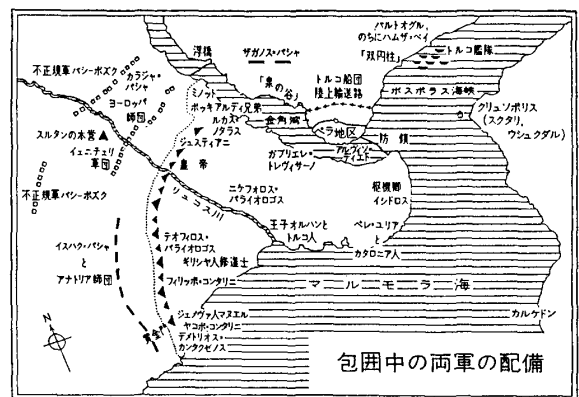
攻略を試みようとした。この計画は、確かにギリシアの艦隊を押さえ込むことに成功した。大砲はギリシアの船を破壊したのである。しかしながら、オスマンの艦隊は金角湾に入る防鎖を越えることができなかった。

メフムトは、海上にこの戦争の勝利のカギがあることを見抜いていたようである。メフムトは、ポスポラ湾にいた艦隊を金角湾に陸地を通過して移動させることを考え、実行したのであった。船を木製ローラーのようなもので運ばせたのである。その一方で、「泉の谷」〔地図2参照〕には金角湾内に向けて大砲が備え付けられていた。この作戦によって、オスマンの艦隊が金角湾の内部に入ることに成功し、ギリシアの艦隊との海戦が行われた。そして、作戦上の失敗もありビザンツ方の艦隊は、大砲によって援護されたオスマンの艦隊に敗れ去ったのである。金角湾はメフムトの手に落ち、コンスタンティノープルは喉もとに刃物をつきつけられた形となってしまったのだ。



地図1

出所：ラシマン 1983



地図2

出所：ラシマン 1983

5月29日、オスマン軍は最後の突撃をおこなうこととなる。その時、大砲の役割はどうだったのだろうか。クローの取り上げる史料によれば、「大きな鉛の弾丸」が飛び交う中を、イエニチェリ、その他オスマン軍が戦場を駆け抜けたという〔クロー 2000：67〕。大砲は、歩兵の突撃を援護していたと思われる。そして、この突撃によって、ビザンツの軍を率いた中心人物のジュスティニアニが倒れる。(史料上で「弾丸」であると確認できるなら劇的なのだが) 彼は矢もしくは鉛の弾丸によって倒れたらしい。

そして、コンスタンティノーブルはこの日を以ってオスマン帝国の手に落ち、ビザンツ帝国の命脈は絶たれてしまうのである。

## おわりに

本稿では、まず「火薬帝国」というものが、いかなるものかということ論じ、そののちオスマン帝国の歴史について述べてきた。そのなかで、「火薬帝国」については、火器と国家、そして社会的影響についての提言だということはわかっていただけかと思う。ただ一方の、オスマン帝国の歴史については私自身の意図が明確ではなかったかもしれないので、それをまとめて代えて示しておく。

オスマン朝と「火器」、オスマン朝と「軍事組織」の関係を歴史的に眺めていくと、ある似通った状況が見られた。それは、イスラム圏ではオスマン朝の生まれる以前から、火炎兵器を使用し、奴隷軍人システムを用いていた。オスマン朝は、それらを自らに適合する形で受容していった。それに

欠かせなかったことがバルカン半島に侵入し支配することであった。それによって、バルカン半島でヨーロッパで使用された大砲や銃に触れ入手し、デヴルシメ制度でキリスト教徒の奴隷を得ることができるようになった。つまり、イスラムの伝統とバルカン半島の占領が、オスマン朝の勢力伸張のひとつの要因と考えている。比喩的な言い方をすると、「イスラム圏」というハードに、「バルカン半島」というソフトがあってはじめて、オスマン朝を「帝国」ならしめることになったのではないか、とわたしは考えているのである。

そして、わたしが最後にコンスタンティノーブルの陥落を描いたのは、この場面で大砲が使用され、そしてイエニチェリが突撃するというところで、それまでの記述の「帰結」と「象徴」の意味をこめたかったからである(象徴ゆえ、物語的記述であるという批判は慎んで耳を傾けたいと思う)。

最後に若干の言い訳を述べておきたい。「火薬帝国論」の検証のために、本稿は試みられたわけであるが、オスマン帝国の歴史を考察することは困難を極めた。そのため、本稿ではコンスタンティノーブルの陥落までのオスマン帝国と火器について述べられている。それゆえ、IとIIを繋ぐ意図に釈然としないものが感じられるかもしれない。確かに、コンスタンティノーブルの占領までの範囲では火器が及ぼす社会的影響を論じようとするには、さらに時代を下る必要がある。実をいえば、16世紀から17世紀に至るとオスマン帝国と火器の関係に、重要な論点が生じるというような研究があることがわかっている。つまり、今後オスマン帝国と火器について論じていくことは

可能である。また、その研究が本稿よりむしろ「火薬帝国」と関連していることであると思われる。それゆえ機会があれば再びこの件に着手したいと考えているので、今回本稿が予備的考察の段階に留められていることをお許し願いたいのである。

## 参考文献

- アルハサン・アフマド Y., ドナルド R. ヒル  
1999 『イスラム技術の歴史』(多田博一・原隆一・斎藤美津子訳) 平凡社
- Inalcik, H 1996 “The Socio-Political Effects of the Diffusion of Firearms in the Middle East.”, in Adas, Michsel ed. *Technology and European Overseas Enterprise*. pp. 195-217
- 江上波夫他編 1997 『詳説 世界史』 文部省認定済教科書 山川出版社
- 小沢郁郎 1986 『世界軍事史』 同成社
- オストロゴルスキ、ゲオルク 2001 『ビザンツ帝国史』(和田広訳) 恒文社
- 加藤友康編 1999 『歴史学辞典』8巻 弘文堂
- 権山紘一編 1985 『大航海時代の戦争』世界の戦争6巻 講談社
- クレイファー、ウエリッヒ 1982 『オスマン・トルコ帝国』(戸叶勝也訳) 佑学社
- クロウ、アンドレ 1998 『メフムト二世—トルコの征服王』(岩永博他訳) 法政大学出版局
- 柴宣弘編 1998 『バルカン史』世界各国史18 山川出版社
- 鈴木董 1993 『オスマン帝国の権力とエリート』東京大学出版会
- 1993 『イスラムの家からバベルの塔へ—オスマン帝国における諸民族の統合と共存』リプロポート
- 1997 『オスマン帝国とイスラム世界』東京大学出版会
- チポラ、C. M. 1996 『大砲と帆船—ヨーロッパの世界制覇と技術革新』(大谷隆昶訳) 平凡社
- 尚樹啓太郎 1999 『ビザンツ帝国史』東海大学出版会
- 永田雄三、羽田正 1998 『成熟のイスラーム社会』世界の歴史15 中央公論社
- ニコル、デヴィト 2001 『オスマン・トルコの軍隊—1300—1774大帝国の興亡』(林令夫訳) 新紀元社
- ハウツムブロム、ヨハン 1999 『火と文明化』(大平章訳) 法政大学出版局
- 林佳世子 1997 『オスマン帝国の時代』世界史リブレット19 山川出版社
- パーカー、ジェフリイ 2001 『長篠の合戦の世界史—ヨーロッパ軍事革命の衝撃』(大久保桂子訳) 同文館
- パーシー、アーノルド 2000 『技術の千年史』(林武監訳、東玲子訳) 新評論
- パーマー、アラン 1998 『オスマン帝国衰亡史』(白須英子訳) 中央公論社
- ブローデル、フェルナン 1993 『地中海Ⅲ 集団の運命と全体の動き2』(浜名優美訳) 藤原書店
- Petrovc, Djurdjica 1975 “Fire-arm in the Balkan on the eve of and after the Ottoman Conquests of the fourteenth and fifteenth centuries”, in Rarry, U. J. and M. E. Yapp, eds. *War, Technology and Society in the Middle East*. pp. 164-191
- 前島信次編 1982 『西アジア史』世界各国史11 山川出版社
- マントラン、ロバール 1982 『改訳 トルコ史』(小山皓一郎訳) 文庫クセジュ 白水社
- 三橋富治男 1984 『オスマン帝国の栄光とスレイマン大帝』清水新書
- ラシマン、スティーブン 1983 『コンスタンティノーブル陥落す』(護雅夫訳) みすず書房
- ルイス、バーナード 2001 『イスラーム世界の二千年—文明の十字路—中東全史』(白須英子訳) 草思社